

禅茶録（その一）

東都 じゃくあん 寂庵 そうたく 宗澤 著（注1）
片野 慈啓 訳

はじめに 現代語訳『禅茶録』に寄せて

近年、人間禅道場でも「茶禅一味」ということが取り上げられ、大きな茶会も各地で行われるようになりました。そんな折、若い頃から愛読してきた『禅茶録』を読みなおし、これを自分で易しい現代文にして多くの方に広めたいと思いました。

禅と茶がどういう点で一味なのか、筆者寂庵宗澤は、深い体験をもとに適切な言葉で語っています。目に見えない部分での茶道の根幹に関わることの記述は、禅の道を深く味わった方にして初めて書くことができた傑作と私は思っております。

この一文が、茶道に励む方々の内面の道しるべになることを願って、ここに掲載させていただきます。

下書きを了空庵無繩老師に見ていただき、直していただきました。謹んで感謝申し上げます。

また、原稿を活字にするにあたり、平川清巖居士と大石潭州居士のご協力をいただきました。ありがとうございました。

また原文は人間禅発行の本の他、幾つかの出版社から出版された本に載っておりますが、主に人間禅から発行された本を基にしていることをお断りさせていただきます。

(一) 茶事は禅道を宗とする事

喫茶に禅道を主とするは、紫野の一休禅師より事起れり。其の故は、南都称名寺の珠光は、一休禅師の法弟なり、茶事を嗜^{たしな}みて日々に行ひけるを、一休禅師見たまひて、茶は仏道の妙所にて叶ふべき物ぞとて、点茶に禅意を移し、衆生の為に自己の心法を觀ぜしむる茶道とは成れり。故に、一切茶事にて行ひ用ふる所、禅道に異ならず^{こと むひんじゆ}。無賓主の茶、体用、露地、数奇、侘、此等の名義を初^{はじめ}として、此の他一々禅意に非^{あらざ}るはなし。委曲は末に発揚すべし。是^{こと}をもつて詩の句に、「茶味と禅味を知量す」る旨いへる^{まこと} 実^{まこと}に格言なり。されば奇貨珍宝を愛し、酒食の精好^{えら}を拵^{もてあそ}び、或は茶室を結構し、庭の樹石を翫^{もてあそ}びて遊樂の設^{もつけ}となすは、茶道の原意に違へり。只、偏^{たが}に禅茶を甘んじ修行せんこそ、吾道の本懐たらめ。

(一) 茶の事は禅の道を基とする事

茶を飲むということについて、禅の道を中心とするということは、京都^{むらさきの} 紫野の一休禅師から起った事である。其の訳は、奈良の平城京の称名寺に村田珠光^{しょうみょうじ} という人が居て、この人は一休禅師に参じて禅の指導を受けた人だが、茶の事を好んで心うちこみ毎日実行していたのを、一休禅師がご覧になって、茶は仏道の良き所にかなう物だ、と言って、茶を点てる行為に禅の主旨を重ね、世間一般の人の為に自分自身の心をよく觀察させる方法としての茶道と成ったのである。だから、すべて茶の道で実行することは、禅の道と違いはないのである。無賓主^{むひんじゆ}の茶、体用、露地、数奇、侘、比^{これら}等の名を初めとして、此の他一つ一つ禅の心でないものはない。細かい事は今後、さかんに表すべきである。このことを基に詩の言葉に「茶の味と禅の味^おを推し量^{はか}る」と言う言葉は実に格言である。だからかわった珍しい宝物を愛し、酒や食事のきめ細やかな味や見た目を拵^{えら}び、或は茶室を立派にし、庭の樹や石を思いのままにして遊び楽しむための仕度とするのは、茶道の

基の心とは違ってしまっている。只ひたすらに禅茶を満足に思い修行することこそ、自分の道のかねてからの願いである。

点茶は全く禅法にして、自性を了解^{りょうげ}するの工夫なり。釈尊四十年来所説の経旨は、諸世界の衆生の為に、本明^{ほんみょう}を開発したまふ義のみにて、心外無法^{しんげむぼう}也。夫れを種々、因縁譬喩^{ひゆ}言詞にて、方便説示したまへり。茶事も亦方便知見に擬して、点茶するの所作に託し、本分を証得すべき観法^{かんぼう}なり。凡て諸仏の教化^{きょうけ}に別なし。

茶を点てることは全く禅と同じ方法であって、自分の本性^{りょうかい}を了解する工夫である。釈尊が四十年来説かれたところの諸々の説法の主たる内容は、いろいろな世界の衆生の為に、本来の智慧を開き導かれる道理のみであって、心を離れて別に千差万別の世界が存在するものではないのである。それをいろいろ、原因^た、譬え、言葉などで、巧みな方法として説き示されたのである。茶の事もまた巧みな方法、悟り知る智慧になぞらえて、茶を点てる動きにことよせて、人々の本来の性質をはっきりわからせるべき観心^{かんしん}の方法である。すべて諸々の仏が人々を仏道へ導くこととかわりがない。

然るを当今、茶道を排斥したる書あまた世に出で、非礼の礼を行ふよなど口を極めて詈^{ののし}れど、そは禅意^{うずも}埋^{あや}れて異しき情態に変ぜる末を取りて咎^{とが}むるなれば妨げなし。若し本面目を理会せば、何ぞ必しも誹^{そし}り言はむ。特に禅茶には、礼に勝れる重き道あり。さすれば、礼のみ執^{しゅう}するは、落^か邊際^{たをち}の見なり。礼を以て仏の妙法に比すれば、大千世界の一島に等し。礼は仏道の^{しやう}枝葉なり。『金剛経』の注に、「仁義礼智信を行ふと雖も敬すべからず、人相と名づく」云々と。

それなのに、最近、茶道をしりぞける書物がたくさん世に出て、礼

にそむく礼を行うよ、などと口を極めて非難するが、それは禅の心が埋もれておかしい様子になった果てを取り上げて咎めることなのでさしつかえない。もし本当の姿をわかればいつも悪く言うことはないであろう。特に禅茶には礼より勝れた大切な道がある。それだから、礼ばかりにこだわるのは、片手落ちの見解である。礼を以って仏の妙法と比べれば、大千世界に浮かぶ一つの島にすぎない。礼は仏道のささいな枝葉である。『金剛経』の註に「仁義礼智信を行ふと 雖も敬すべからず、人相と名づく」とある。

『老子』に、「^{やぶ}道徳を毀つて以て仁義を為すは^{あやまち}聖人の過也」ともあれば、^{み し う も つ}未始有物の先より存在せる、^{み み よ う}玄々微妙の大道にして、人為を^{じ ね ん}仮らぬ自然の理なり。是の理を領悟すべき禅茶の工夫を^{そ し}誹らば、^{も う じ ん}自暴自棄の妄人にして、^{お の れ}己が^{こ ぶ し}拳を加へて、^{こ う べ う}己が頭を撲ち破らんに^{し ん ち ゃ}類せり。吾門の人、慎んで此の一大義を尊奉し、禅味の真茶を修行すべし。

『老子』に、「^{やぶ}道徳を毀つて以て仁義を為すは^{あやまち}聖人の過也」ともあるので、物が表れる以前より存在する、^{み み よ う}玄々微妙の大道にして、人の手を経ない自然の真理である。この真理を悟って手に入れるべき禅茶の工夫を悪く言うのは、自暴自棄の誤った人であって、自分のげんこつでたいて、自分の頭を打ちこわそうとするのに相当する。私の門の人、慎んでこの一大義を尊重し、禅の味わいのある本当の茶道の修行をすべきである。

(二) 茶事修行の事

^そ夫れ茶の原意は、器の^{えら}善悪を^{えら}扱はず、^{えら}点ずる折の容態を論ぜず、只、茶器を扱う三昧に入りて、本性を^{えら}観ずる修行なり。

^さ扱て、茶事に託して自性を求めるの工夫は^た他に^たあらず、主一無適の一心をもつて、茶器を扱ふ三昧の義なり。たとへば茶杓を扱はんとなら

ば、其の茶杓へのみ^{もつぱ}純ら心を打入れて、余事を^{すこ}微しも^{おも}想はず、始終扱ふ事なり。又、其の茶杓を置く時にも、前の如くに心を深く寄せて置くなり。是は茶杓に限らず、一切取扱^{いず}ふ器物、何れも右の意に同じ。又、其の扱う器物を置きはて、手を^ひ放ち曳く時、心はすこしも放たずして、次に扱^{ほか}はんとする他の器物へ其のまゝ心を寄せ移して、何処^{いすこ}までも気を^{ゆる}縦めず、^{かた}形の如くにして点ずるを、^{きつづきた}氣続立てとは云へり。只、茶三昧の行ひなり。了解は其の人の志に由りて、強^{あなが}ちに年月を^{わた}渉るに及ばじ。只、起^{きいちねん}一念の深淺に在るべければ、ひたすら心を^{もつぱ}専らし、志を致して茶処の三昧修行をこそ勤むべけれ。

(二) 茶事修行の事

それ、茶のもともとの心は、器の善し悪しを選ばず、お茶を^た点てる時の姿のことは何も言わず、只、茶器を扱う三昧に入って、自己の本心本性をしっかり見る修行である。

さて、茶事にことよせて自己の^{ほんしやう}本性を求める、という工夫はほかでもない、心を^い専一にして他に^い適かせない、という精神を純粹に集中させた^{いっしん}一心をもって、茶器を扱う、という三昧の意味である。たとえば、茶杓を扱おうと思えば、其の茶杓へだけひたすらに心を打ち入れて、他の事を少しも思わず、はじめから終わりまで扱う事なのである。又、その茶杓を置く時にも、前と同じように心を深く寄せて置くことなのである。是は何も茶杓に限らず、一切の扱う道具はどれもそれと心は同じである。又、その扱った道具を所定の所に置き終わって、手を離して戻っていく時、心は少しも離れないで、次に扱おうとする他の道具へそのまま心を寄せ移して、どこまでも気を^{きつづきた}抜かず、形式の通りにして茶を点てるのを^{きつづきた}氣続立て(注2)と言うのである。只茶三昧の行いである。こういうことを深く体得することはその人の志によることであって、むやみに年月を長くかけることなのではない、只、茶三昧を行おう、という思いの一念の深さ加減にあるものだから、ひ

たすら心を純粹てんぢやに点茶一つにしほり、志をしっかりと立てて茶道の三昧修行をのみ、努力すべきである。

三昧は梵語なり。翻譯して正受しょうじゆと云う。何にもあれ、一心を一処に住せしむるを云へり。遠法師の云く、「夫れ三昧と称するは何ぞ、専ら寂相を思ふしひの謂なり、思ひ専らなれば則ち志一にして分たず、相寂なれば則ち気虚にして神朗しずなり、気虚なれば則ち智恬かに其れ照す、神朗ほがらかなれば無幽にして徹せず、斯の二つは乃ち是れ自然の玄符、一を用ひて用を致す也」と。又、『法華經』に、「静室禅定に入る、一心一処坐は八万四千劫」と有りて、一坐の觀法は八万四千劫なりとぞ。茶場ちやじょうに入りて三昧を修するは、即ち一坐の觀法なり。又、『優雲宝鑑』に、『宝王論』に云く、「一相念仏三昧を修持する者は、当に行住坐臥けいねんに繫念して忘れず、今より昏寐にも亦繫念して覚むれば即ち読む」とも引きたり。此等に倣ひて、点茶せんにも二六時中けたい懈怠なく一処に繫念けいねんして、偏ひとえに勇猛心を発し修行三昧に入るべし。

三昧ほんごは梵語である。翻譯して正受しょうじゆという。とにかく一心を一カ所に留めさせることを言う。遠法師の云うには、「それ三昧と称するは何かというと、ひたすら寂の姿を思う、ということである。心がひたすらならば、それは志が一つで、分かれていない、姿が寂ならばすなわちその気は芯底しんそこ明るい、すばらしく明るければ暗い所が無く頑固にこり固まらない。この気虚ききよと神朗しんろうの二つは、すなわち自然の深遠なしるし、一つですべての用をすますのである」と。又、『法華經』に、「静かな部屋で禅の三昧境に入る、それは、ひたすらな純な心で一カ処で坐禅することが気の遠くなるような長い時間にもつながることなのだ」と有りて、ひと時坐禅で集中することは恐ろしく長い悠久ゆうきゆうの時間ひたに浸ることなのだ。茶の場に入って三昧を修得することは、これ即ち、ひと時の坐禅の修行と同じことなのである。又、『優雲宝鑑』

の『^{ほうおうろん}宝王論』に云く、「ただ一つ^{いわ}念仏三昧を修行する者は、^{まさ}当にどんな時にも思いを続けて念仏を忘れず、今から寝る時も又念じ、覚めても又念仏する」とも言っている。此等に倣って、茶を点てるにもいつでも怠けることなく一カ処毎に念慮をつないで、ひたすら勇猛心を発し、修行三昧に入るべきである。

扱て、茶器の扱ひをもつて本性を觀ずるは、直きに坐禅工夫の教なり。坐禅とて静^{じょうもく}黙し居るのみが工夫にあらず、夫れをば闇証の坐禅とて、天台智者も嫌ひたまへり。故に去来坐立^{ざりゅう}共に行ふが坐禅の要法なれば、茶事にても是くの如く行住坐臥^{けたい}、懈怠なく修行すべきことなり。但し茶事にては、行住坐臥の行ひはなるまじきぞと、或は疑ふべけれど、結句行はるる者なり。如何となれば、常に茶室に入りて点喫修行する折の如く、専ら意^{こころ}を用ひて悉^{ことごと}く一切の義を行ひ、行住坐臥に油断なく勤むる事なり。日用動静^{どうじょう}の間油断なく、此の意^{こころ}を施して事を為せば、思慮を劣せずして一切能く調ひ、君臣父子人倫の道も、自ら其の極処に造るべし。特に彼の坐禅觀法は、兎角、無量の念想浮び出て煩はしきものなれど、深く工夫すれば、其の工夫に圧されて余念起らざるなり。されど元来、容^{かたち}を仮りて行はざる故、ややもすれば工夫の一念、余念に混じて粉擾の憂ひ生じやすし。然るに茶道は、肢体を活動して其物を扱ひて心を彼に寄託すれば、(心を)他情に奪はるる事なく、且つ工夫を尽すに難^{かた}からず。是れ一休禅師の妙智に出て、実に感賞すべきの妙道也。

さて、茶器を扱うことを通して、自分の本^{ほんしゅう}性を觀るのは、まさに坐禅工夫の教えと同じである。坐禅といっても静かに黙っているだけが工夫なのではない、そういうのを闇証の坐禅といって、天台智者も嫌っていた。それ故、行ったり来たり坐ったり立ったりなども共に行うのが坐禅の大事なやり方であるから、茶事でもそのように、どん

な時でも常に怠けることなく修行すべきである。但し茶事では、どんな時の行為でも、という訳にはいかないだろうと、或は疑うかもしれないが、結局できるものなのである。どうしてかというときに常に茶室に入って点てたり飲んだりする修行を行う時のように、専ら心を用いて悉くすべてのことを行い、どんな時でも油断なく勤める事なのである。日常動く時も油断なくこの心をもって事を為せば、思慮をわずらわせずして、一切よく調い、主君と臣下、父と子などの人の倫理の道も、自ら其の肝心な処にかなうであろう。特にかの坐禅観法は、夥しい雑念が浮び出て煩わしいものであるが、深く工夫すれば、其の工夫におされて余計な念慮は起こらないものである。しかし元来、体を動かしながら行わないので、どうかすると工夫の一念は余計な念慮に混ざって細々しい心配ごとが生じやすい。しかるに茶道は肢体を活動してその物を扱って心を茶器に寄せるものであるから、心を他の情に奪われることなく、かつ工夫をし尽くすことは難しくない。是れ一休禅師のすぐれた智慧より出ている、まことに感心しほめるべきすばらしい道である。

(つづく)

(注1) 著者の履歴は不明。僧名から大徳寺系の禅僧であり、また東都(東方の都)とあるので、江戸在住の人であったと思われる。

(注2) 『茶と禅』伊藤古鑑著(春秋社)では「きぞくだ気続立て」、『禅茶の心』柴山全慶著(春秋社)では「きつづきだ気続立て」となっている。

著者プロフィール



片野慈啓(本名/鈴枝)

昭和23年東京生まれ。千葉大学教育学部卒業。
元小学校教諭。昭和44年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅輔教師。